

平成 22 年 4 月 20 日

新潟市長・新潟市美術館長
篠田 昭 様

新潟市美術館を考える会
代表 林 紀一郎

要 望 書

このたび、新聞テレビ等で報道された新潟市美術館の実態は、地方自治体首長の文化行政のありように対する問題点を改めて問い直し、浮彫りにする契機となった、と言えます。

私たちは、新潟市美術館が直面する諸問題を一日も早く解決し、新潟市民に真の意味で“開かれた美術館”として改善・再出発を図ることを貴職に期待し、下記事項の速やかな実行を要望します。

記

1. 新潟市美術館が、博物館法に則る公立美術館本来の機能を回復することを最優先とすること。

不幸にして今回表面化した展示・管理・保全などの問題点で、国宝・重文級の美術品を展示・公開可能な美術館は、新潟市内には一館も存在しない。1985 年開館以来 20 余年にわたり真摯に営々と築いてきた市美術館であったが、今や対外的信頼は失墜してしまった。新潟市民にとって誠に残念であり、不幸な出来事だったのである。

2. 貴職が北川氏の館長就任前後に、異動配置転換した前学芸員たちを直ちに職場に復帰させること。

このたびの貴職の平成 22 年度における美術館職員人事は、依然とし

て“北川フラム路線”の残滓があり、私たちは納得し難く、断乎反対する他ない。

美術品の展示・管理・保存法を知悉する彼ら学芸員が在任していれば、今回の“カビ・虫”事件は起こらなかったであろう。

これからも相変わらず市長好みの路線で、有能な専門学芸員不在のまま運営を続行する限り、今後、美術品の管理・保存などの問題で国の重要美術品だけでなく、他館との作品の借用・展覧会の巡回などにも支障をきたす恐れがあり、美術館としての機能は失われること必至である。

3. 美術館長には、経験豊かで明日に生きる美術館の確かなヴィジョンを有し、私利私欲のない良識ある人材を迎えること。

また、市民との共有施設である公立美術館を私物化することを回避すること。ましてや「美術館のプラットフォーム化」などと唱え、興行的な催事場とするような北川路線を踏襲した美術館運営は、いよいよ美術館を荒廃させ、今回の失態から何ら反省もせず何ら学ぶこともなかった、と非難されても仕方がない。

催事はそれ相応の施設で行うべきである。市美術館ではなく、例えば閉店後の大和デパートや西堀ローサといった「まちなか中心街」などはどうだろうか。

4. 今回のカビ・虫発生による市美術館の管理・保全・運営の問題点を徹底検証し、再発防止に努めるとともに、その検証結果を公表すること。

検証作業には、施設・空調・建築など専門の関係者と、開設当時の学芸員を加え、さらに公正な第三者をも参加させて検証の透明公正性を確保すること。

また、市長による前館長任命・更迭に至る経緯とその任命責任を明らかにすること。公金浪費の実態（カビ除去費、今後の館内燻蒸予算、‘水と土’関連の作家への謝礼など）を明らかにすること。

以上の4点について、市長の責任ある回答を私たちは要望するものである。